
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No.134

July 2024

2024 年度大会(10月5日～6日)

プログラム決定

東京大学本郷キャンパスにて対面で開催予定



【2024年度ロシア史研究会大会について】
すでにお知らせしたとおり、ロシア史研究会 2024年度大会は10月5～6日に東京大学本郷キャンパスで、完全対面の形で開催される予定です。会員の皆様の積極的な参加をお待ちしております。新型コロナウイルスの感染再拡大や自然災害など、特段の事情が生じない限りは、コロナ禍以前の形に戻ることになります。大会プログラムの概要は以下をご覧ください。報告要旨は次号(大会特集号)に掲載予定です。大会に関する事務的な事項でのお問い合わせは、ロシア史研究会事務局(sakon.yukimura.112/あつと/m.kyushu-u.ac.jp [/あつと/を@に変換してください])左近宛にお送りください。

＜大会時の託児補助＞

今年度は、「任意の託児所利用に対する補助」(自宅でのシッター利用等に対して、1日につきお子様1人あたり5000円を支給)を実施いたします。8月下旬にMLにおいて告知し、その後に申請を受け付けます。ご質問がありましたら、事務局までお気軽にお寄せください。

(写真：会場 東京大学本郷キャンパス)

【ロシア史研究会 2024 年大会 プログラム】

10 月 5 日(土)

	A 会場	B 会場
10:00~10:55	「ペレストロイカ以前のソヴィエト・アルメニア社会に伏流したナゴルノ・カラバフ問題」 報告者:吉村貴之(早稲田大学) 討論者:立石洋子(同志社大学)	パネル「コルチャーク政権とシベリア出兵」 組織者:兎内勇津流(北海道大学) 報告者: 中嶋毅(東京都立大学)「コルチャーク政権下の N.V.ウストリヤーロフ」(仮題) 兎内勇津流「アナトーリー・ペペリヤーエフとシベリアの内戦」(仮題) 及川琢英(北海道大学)「ウラジオ派遣軍保管武器の張作霖引渡問題」(仮題) 討論者:櫻井良樹(麗澤大学)
11:00~11:55	「ペトログラード 1918 年春と単一労働者党」 報告者:辻義昌(早稲田大学) 討論者:池田嘉郎(東京大学)	
12:00~13:30	昼休み(委員会)	
13:30~16:00	共通論題「いまロシア史をどう書くか:個別史と世界史のあいだ」 報告者: 宮崎千穂(静岡文化芸術大学)「鉦泉は誰のものか:近代におけるロシア海軍医学と雲仙」 金山浩司(九州大学)「科学の領域とソ連イデオロギーの領域:歴史的に考える」(仮題) 半谷史郎(愛知県立大学)「冷戦下のソ連留学:ある日本人ロシア語学徒の軌跡」 討論者:飯島渉(長崎大学)	
16:15~17:45	総会	
18:00~	懇親会	

10月6日(日)

	A 会場	B 会場
9:30~10:25	「アラル海問題について現場ではどのように語られていたか? :ペレストロイカ期『ソヴィエツカヤ・カラカルパキヤ』紙を読む」 報告者:地田徹朗(名古屋外国語大学) 討論者:宇山智彦(北海道大学)	「帝政期におけるサハリン税関の設立と活動:極東の辺境開発に対するロシア政府のアプローチの起源と結果」 報告者:アントネンコ・ヴィクトリア(北海道大学) 討論者:神長英輔(国学院大学)
10:30~11:25	「第二次世界大戦期のソ連の対日外交と駐日外交官(仮)」 報告者:シュラトフ・ヤロスラブ(早稲田大学) 討論者:花田智之(防衛研究所)	パネル「近代ロシアを考える:高田和夫さんの著作を読む」 組織者:豊川浩一(明治大学) 報告者:
11:30~12:25	「『俄羅斯北館』の成立と18世紀シベリア正教伝道」 報告者:畔柳千明(早稲田大学) 討論者:濱本真実(大阪公立大学)	吉田浩(岡山大学) 竹中浩(奈良大学) 田中良英(宮城教育大学)
12:30~13:30	昼休み	
13:30~16:00	共通論題「いまロシア史をどう教えるか:あるいはロシア史で何が学べるか」 登壇者:磯貝真澄(千葉大学)、下里俊行(上越教育大学)、宮野裕(岐阜聖徳学園大学)、森永貴子(立命館大学)、栗田佳代子(東京大学)	

【新会員の紹介】

2024年5月~6月までの新入会員(名)をお知らせします。

古内敏章(2024年6月12日入会)
所属:図書出版 株式会社かなえ

木村崇さんを偲んで

藤本和貴夫

木村崇さんが2024年4月27日に亡くなった。ロシア史研究会のメールで知った。ショックであった。

JSSEES — 研究を支える基盤

木村さんとの出会いは1980年代の初めであったように思う。関西で、1970年代の末から日本のソ連・東欧研究の成果を海外に発信する欧文雑誌を発行しようという話が進んでいた。この話しは最終的に全国の研究者によるJapanese Society for Slavic and East European Studies(JSSEES)の結成となり、その機関誌“Japanese Slavic and East European Studies”第1号が1980年に刊行された。

編集委員は文学・言語、経済学、法学・政治学、歴史・社会思想・地理学などにわかれたが、事務局は京大に置かれた。その理由は、欧文雑誌を制作する上で、自分たちで版下が作成できる高価なIBMの「活字タイプライター」を京大の教養部ロシア語研究室が持っていたからである。正式名称は「セレクトリック・タイプライター」といい、プラスチック製のボールの表面に文字が刻まれていて高速回転して印字するものである。ボールをとり変えることでローマ字からキリル文字、あるいは書体を変えることができた。現在、われわれがパソコンで打ち出す文字と変わらないが、打ち間違った文字の訂正には時間がかかった。

問題は、費用を節約するためにキリル文字とローマ字をブラインドタッチでタイプできる編集委員がこのタイプライターで原稿を打ち込まねばならないことであった。結局、若手有志が時間を作って京大に通った。当時、中京大学にいた木村さんもその一人で、時々名古屋からやってきてその事務処理能力の高さを見せつけた。それが最初の出会である。

その後、木村さんは、1989年に京大に移り、JSSEESの会務の仕事を引き受け、一時期雑誌の編集長をしていた私とは頻りに会った。またJSSEESがロシア東欧学会と毎年、合同大会を開催するようになると、人文学分野でのシンポジウムの企画で木村さんは腕を振るった。JSSEESは木村さんの研究生活を支える基盤のひとつともなっていた。

日ロ極東学術シンポジウム — ケンカのできる国際人？

もうひとつわれわれを近づけたものに、ロシア極東地域研究者との国際シンポジウムがある。これはウラジオストクのロシア科学アカデミー極東支部歴史・考古学・民族学研究所、ハバロフスクの経済研究所などと1984年から始めた「日ソ(ロ)極東学術シンポジウム」である。関西とロシア極東地域を会場として毎年交互に開催し、そのため2年に一度はロシアでの開催地であるウラジオストクとハバロフスク間を寝台列車で一緒に旅行した。

他方、シンポジウムが日本で開催される場合、会議での報告はあらかじめ翻訳した上で、討論者を立てて議論した。通訳は主催者側の責任となっていた。

1990年以降、ここも木村さんの活躍する場であった。木村さんはレールモントフ研究を専門としたが、専門のワクを押し広げて日ロ社会・文化の比較に惹かれていったようである。たとえば、1991年の第7回シンポジウムのウラジオストクで彼が行った報

告は「日本人の理解したロシア文化」であったが、2003年の第19回シンポジウムの報告は「芸者のロシア的イメージとウォッカの日本的イメージ」、2007年の第23回シンポジウムでは「ロシア人と日本人の死生観の比較研究（両国の文学作品を資料として）」となっている。

木村さんは国際会議となると生き生きしていた。木村さんから聞いた話では、1963年に東北大に入学したが退学してルムンバ民族友好大学に入学、1968年の卒業まで5年間をソ連で過ごしている。ソ連も激動の時代に入っていた。木村さんがこの時代のことを話すことは少なかったが、国際会議でロシア語で論争になった場合でも決して負けなかった。私は学生時代にソ連留学の機会がなかったことを言い訳に、木村さんに「代理戦争」を押しつけることもしていた。

雑誌『セーヴェル』－ 求めた先は

京大の定年後、奥さんの黒岩幸子さんの勤務先である盛岡に移り、われわれの接触は絶えていた。この間、“伝統にしばられた京都”から高校時代まで過ごした旭川など“北の自由な大地”をとり戻そうとしていたのではないかと、京都生まれの私には見える。ハルピン・ウラジオストクを語る会の『セーヴェル』31号（2015年）に木村さんは「やっと「生」地巡礼を果たして」という旅行記を書いている。2014年8月に、木村さんの生まれた中国黒竜江省の勃利に夫妻で旅行した記録である。彼の父母は新婚1年4か月で離ればなれとなり勃利から母に連れられ帰国、父はフィリピンで戦死した。彼は戦没遺児となった。「木村家ただひとりの生き残りとして…父母の勃利という土地に残した思いをしかと確かめて見たかった」という記述がある。中国の残留孤児問題についても、身近な問題として接していた。

昨年春、木村さんと黒岩さん夫妻はJR湖西線で3駅離れたわが家の近所に引っ越してきた。大津市の琵琶湖湖畔の新築マンションで、夏に1万発の花火が打ち上げられ30万人の観客が集まるといわれる、その琵琶湖花火の「特等席」である。

というわけで、8月の花火の日には大勢で押しかけた。旧知の人々、ページにあいしばらく日本に滞在するというロシアの演出家も一緒である。木村さんは数年前から酸素ボンベが離せない生活を送っていたが、意気盛んであった。湖上で打ち上げられる花火の光は室内にいるわれわれ全員を照らした。

今後、琵琶湖花火の日が来るたびに、木村さんは花火に照らされた一瞬の思い出の像として残ることになりそうな予感がしている。

ロシア史研ニューズレター
第134号 2024年7月11日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
(濱本真実・林健太)
〒819-0395
福岡市西区元岡744
九州大学大学院経済学研究院
左近研究室気付
